

発掘調査で分かった！沖縄の太古の暮らし

平成 29 年度企画展

おきなわ むかしむかし

縄文時代の暮らし

2017.
10/24(火) — 11/26(日)

目 次

ごあいさつ	1
沖縄の縄文時代	2
1. 住まい	
住居跡の発掘調査	5
2. 生活	
縄文時代の生活	9
道具作り	10
食料の獲得	11
狩猟・採集【山の幸】	12
漁撈【海の幸】	15
調理の道具 ①土器	18
調理の道具 ②石器	19
3. 他地域とのつながり	
交流の痕跡 土器	22
交流を示す石材	23
おわりに	24

凡例：

1. この図録は、平成29年度沖縄県立埋蔵文化財センター特別展「おきなわ むかしむかし」を補完するものとして作成したものである。
2. 展示・図録の企画・編集は当センター職員の協力を得ながら亀島慎吾が行い、原稿執筆は、亀島慎吾、貝志堅清大、南勇輔、大堀皓平、田村薫が担当した。
3. 現場の写真は当時の調査担当者が撮影し、出土遺物の写真は、沖縄県立埋蔵文化財センター刊行の報告書掲載のものを用いながら、原稿執筆者が適宜撮影した。
4. 本書に使用されている写真・図面等を用いて研究等に使用する場合は、沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵と明記すること。また原図や写真データを利用希望の場合は、沖縄県立埋蔵文化財センターに問い合わせて許可を得ること。

ごあいさつ

九州の南から台湾まで円弧を描くように連なる島々の中に、沖縄県があります。沖縄の周囲を囲むサンゴ礁の海は約4千年前に現在の景観になったといわれ、今日でも豊富な資源を我々に提供してくれます。このサンゴ礁の成立時期は、沖縄考古学編年の縄文時代後期頃にあたります。

今回の企画展では、縄文時代後期から晩期にかけての人々の暮らしについて注目します。この時期になると、沖縄本島や周辺離島も含めた地域で遺跡の数が増えます。遺跡からは住居跡が発見され、各地にムラが形成されていた様子がわかります。陸上動物や種実などの山の幸に加え、貝や魚などの豊かな海の幸を獲得しながら暮らしていました。

生活を支えるための道具としては、土器や石器が数多く出土します。土器は、主に食材を煮炊きするものとして使用されます。石器は、住居を建てる際に必要な木材の獲得及び加工に用いられる場合や、木の実などを磨りつぶす道具として利用されました。これらの実用的な道具に加え、装身具や祭祀的な要素をもつモノも出土します。

出土遺物のなかには、沖縄で得ることのできない黒曜石やヒスイなどの素材を利用した道具や、奄美諸島や南九州地方の土器も出土します。これらの遺物を通して、他地域の人々と交流を行っていたこともわかりました。

遺跡から出土した住居跡や炉跡などの遺構と土器や石器を含むいろいろな遺物から、自然と共に暮らすための知恵や工夫を多く見ることができます。この企画展を通して、当時の思いにも触れながら沖縄で暮らした人達の自然環境に配慮した生活方法を学び、今日の私達の生活を振り返る機会になれば幸いです。

平成29年10月24日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城 亀信

沖縄の縄文時代

沖縄では、約1万年前頃から土器や石器を用いて人が生活していたことがわかっています。この時代を「縄文時代」といいます。

沖縄県下で縄文時代の遺跡が確認されたのは、今から113年前の1904（明治37）年に遡ります。このときの伊波貝塚（うるま市石川）と荻堂貝塚（北中城村）の発見から、沖縄県の考古学研究が開始され、その後も相次いで縄文時代の遺跡が確認されました。

日本列島で大きく発展した縄文時代の大きな特徴として、土器の口の部分が山形になる波状口縁をもつ深鉢形器形という器種の存在と、狩猟採集等を基盤とした定住生活の痕跡が挙げられます。この時代の沖縄の社会文化にもその両方が認められることから、縄文時代の範疇に位置づけられます。

それに加え、曾畠式土器や市来式土器といった九州島以北の縄文土器や黒曜石・ヒスイが沖縄にもたらされ、日本列島の縄文文化との接触があったことが判明しています。これらの遺物からは、当時の沖縄の人達が海を越えた先の地域に目を向けていた様子も窺えます。

このような縄文文化との接触は沖縄本島周辺の北琉球文化圏に限られ、宮古・八重山諸島の南琉球文化圏には別の文化が花ひらいていました。南北に連なる島々を有する沖縄県では、それぞれの地域で多様な文化が育まれていたようです。

沖縄は、縄文文化圏の南端とも言われます。しかしながら、縄文文化自体も南北に延びる日本列島の中で、その土地の自然環境に応じた地域的な特徴を有しており、単一的なものではありません。この点に着目するとき、沖縄の縄文時代の特徴を深く知ることは、多様な地域文化の在り方を捉えることにつながります。



文化圈圖

沖繩歷史年表

表1——沿續諸島時代區分 表2——八重山諸島時代區分



沖縄の主な縄文時代遺跡分布図



【凡例】

赤字は、今回の企画展で展示する遺跡名である。

1. 住まい

住居跡の発掘調査

縄文時代後・晚期の沖縄諸島では、地面を掘り込んで家を作り、台地の縁に集落を形成していたことが、発掘調査によって明らかになってきています。



縄文時代後・晚期の集落（左：シヌグ堂遺跡、右：高嶺遺跡）

当時の家については、その多くが方形状で一辺2~3m程と小型であったことが分かっています。この大きさは、日本列島の同じ時期の住居跡に比べて一回り小さいものでした。

ただし、当時の住居と考えられる竪穴住居は一様ではなく、一辺が4m程の大きさのものや、建物内に炉を持つものと持たないものがあることから、何らかの役割の違いが当時の建物には存在した可能性も想定されています。



縄文時代の住居跡と切り合い関係（左：高嶺遺跡、右：大山富盛原第二遺跡）

また、当時の集落遺跡を発掘すると、新しい住居跡が古い住居跡を掘り込んで作られていることがあります。

この状態を「切り合い関係」と呼んでいますが、「切り合い関係」を調べることで、住居の新旧関係が分かるので、これを基に住居の形の変化を明らかにすることができます。

その成果として、柱跡が家の中心にあり方形に地山を掘りこんだものから、壁を石で囲み柱跡が壁際に見つかる方形状のもの、地山を掘り込んだだけの隅丸方形状へ変化していったことが分かります。さらに、住居内に残る柱の位置の変化から、屋根の形も変化していった可能性が指摘されています。



縄文時代後・晩期の住居跡〔左：喜友名貝塚（縄文時代後期）、右：シヌグ堂遺跡（縄文時代晩期）〕

住居跡を掘ってみると、土器の破片や石器、骨製品などの道具が見つかることがあります。時には、土器の破片がまとまって出土することや、石器が置かれたままに近い状態で見つかることもあります。

これらの遺物は、長い時間をかけて堆積する地層に比べて、捨てられた時期を絞ることができるので、当時の人々の道具リストを窺い知ることができます。

住居跡の発掘調査では、当時の人々が住んだ建物の形だけではなく、生活の様子やその変遷を解明する上で、大きなヒントを得ることができます。



竪穴住居内からの遺物出土状況（高嶺遺跡）



竪穴住居内から出土した道具達（高嶺遺跡）

縄文時代後・晩期の遺跡では、住むための様々な工夫が発見されています。以下では、そのような先人の知恵について紹介したいと思います。

住居跡の壁に石灰岩を積んだものは、掘り込んだ土が崩れるのを防ぐ^{どど}土留めや、地面を深く掘り込めない場所で壁を高くして屋根を支えるなどの役割をもつと考えられています。



石囲いのある住居跡（シヌグ堂遺跡）



張り床のある住居跡（高嶺遺跡）

床は地面をそのまま用いるため、様々な工夫が凝らされていました。

例えば、地面を堅くしめたものや、凹凸の激しい岩盤を平坦にするため、こぶし大の礫を敷いたもの、石灰岩の岩盤に土を張ったものがあります。

また、斜面に家を建てるため、岩盤の上に土留めの石積みをして土を盛り、平場造成を行った痕跡や、集落を区切る目的の可能性がある石積みが確認されています。

このように、当時の人々は機械も鉄器も無い時代から、石器などの道具を用いて住むための空間を作り出していました。遺跡の発掘調査からは、そういう先人の知恵や技術を窺い知ることができます。



土留めの石積み（シヌグ堂遺跡）

伐採具

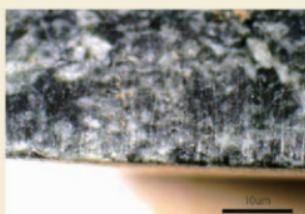
森林と共に生きる中で、最も重要な道具の一つとして、石斧などの伐採具が挙げられます。周囲の開拓、樹木の伐採、住居製作など、木材獲得・加工の主たる実用品として、^さ伐る、^あなる、削る、孔を開けるなど多様な動作を行い、目的に沿って形態や大きさが変化します。

また、遺跡から出土する石斧からは、刃部に残された使用痕や破損部位の状況等から、どのように使用され、廃棄されたのかを想定することができます。



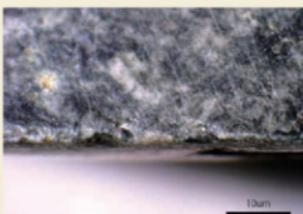
出土した各種石斧

一般的に、比較的大型で両刃の縦斧は伐採に、小型の片刃横斧は木材加工用途が想定されますが、状況や手持ちの道具によって様々な使い方があったと考えられます。



使用痕と刃の向き

伐採や木材の加工などに際し、刃部進行方向に沿って線状のキズがつきます。刃に対して垂直なら横斧、斜めなら縦斧と判断する一つの材料になります。



刃部の破損

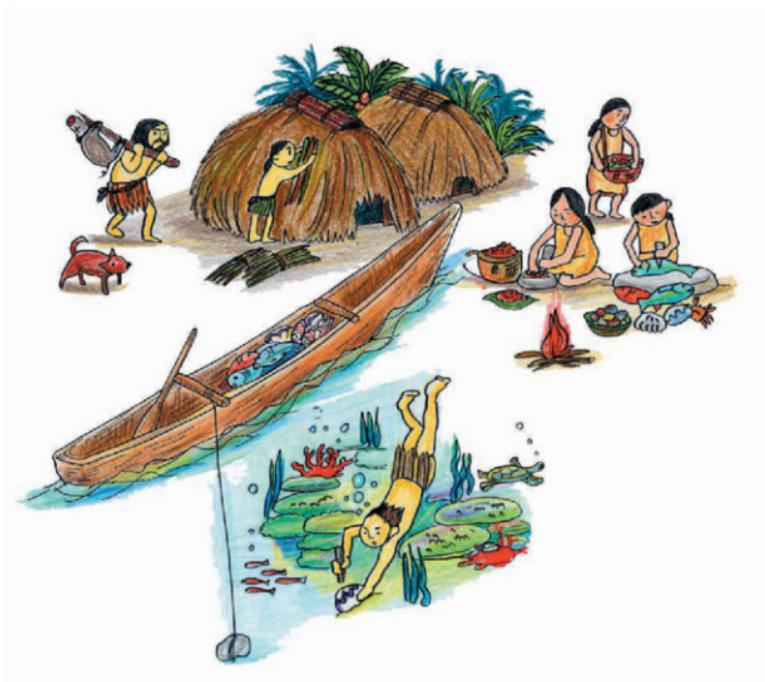
使用によって破損した刃部。縦斧として使われた場合、刃部の端に集中的に衝撃を受け、端から破損する場合が多いです。

2. 生活

縄文時代の生活

今から約1万2千年前から気候の温暖化に伴い、日本列島は現在のような形になり、豊かな森や海に育まれた縄文文化が栄えます。沖縄諸島ではサンゴ礁の形成により資源豊かな海に恵まれ、海獣の骨や貝類といった海の資源を多用し、日本列島とは異なった独自の縄文文化が育まれました。

ここでは、沖縄の縄文時代後・晩期における生活の様相についてご紹介します。暮らしに使っていた道具、食料の獲得・調理からみた縄文時代の食生活、装身具から見える精神文化などからは、豊かな自然の恵みをもたらす森や海と共生していた縄文時代の人々の姿が窺えます。



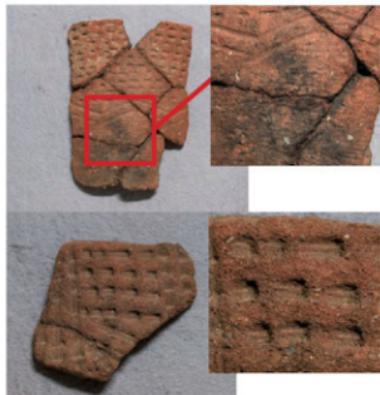
道具作り

縄文時代は、生活を営む上で様々な道具が作られます。その代表的なものが、土器や石器、貝・骨製品です。

煮炊きなど主に調理に用いられた土器は、縄文時代から作られるようになります。土器づくりでは、まず素地となる粘土を作ります。粘土に混和材と呼ばれる石英や砂粒などを混ぜることにより、成形が容易になるとともに、耐火性や焼成時の仕上がりが向上します。土器の素地は、粘土を帯状にして積み上げ、土器の用途に応じて整形します。そして、貝殻やヘラなどで土器の表面を調整し、文様を付けて焼成します。粘土は、可逆性があることから様々なデザインが可能で、時代や地域ごとにいろいろな土器が生まれました。

石器は、樹木を切り倒す際に用いられた石斧、狩猟に使われていたと考えられる石鎌、食材の加工などに用いた敲石や磨石、石皿など、用途に応じて様々な種類があります。石斧は、石材を打ち欠き、研磨を行って製作されます。石鎌は、石材を打ち割って出来た剥片に、尖った角や木を押し当てて剥離する技法（押圧剥離）により整形します。石器に用いられる石材は、製作方法や用途に応じたものが選択されており、石斧に用いられる緑色片岩や輝緑岩、石鎌に利用されるチャートなどは沖縄本島北部や慶良間諸島から持ち込まれていました。

貝製品は、二枚貝を穿孔して漁などに用いられた貝錘や、二枚貝の縁部に刃部を作り、物を切る道具として用いた貝刀、ヤコウガイの蓋を敲打器として用いたものなどがあります。中には、死貝の殻を素材としたものもあり、貝の形状や用途に合わせて、素材を選択していたことが窺えます。



土器にみられる製作痕跡
上：ハケ目調整 下：施文



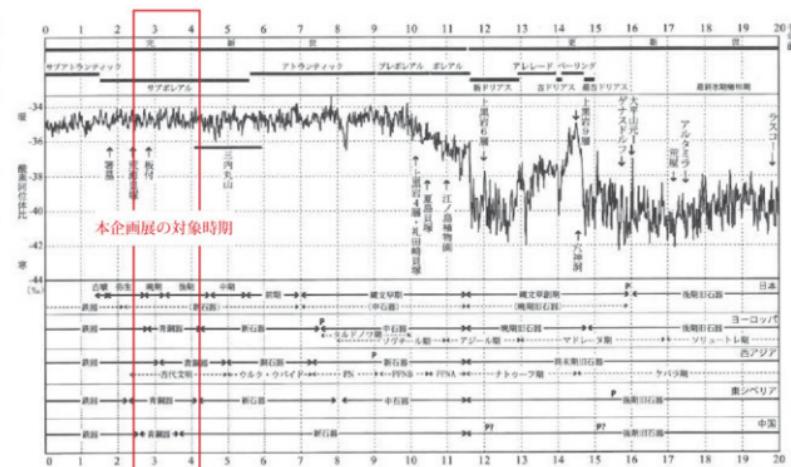
磨製石斧の製作と加工具
左写真の左が未成品で右が完成品。加工には多面体の敲石や砥石（右写真）を用いました。



貝・骨製品の製作と加工具
写真の左・中央の資料には擦切りの痕跡が残っています。写真右のような石製の擦切具の使用が想定されます。

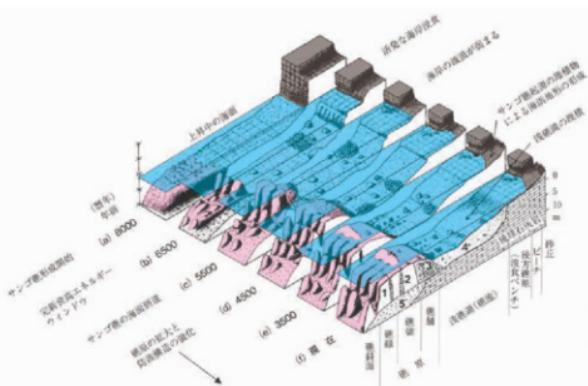
食料の獲得

約1万2千年前からの温暖化によって沖縄ではサンゴ礁が発達していき、縄文時代後期に現在のサンゴ礁が完成しました。遺跡から発見される様々な動魚骨、貝類、種実からは、亜熱帯常緑広葉樹林帶環境の再生力の高い植物資源と、安定したリーフ内の海洋資源を背景に、縄文時代の人々は陸・海の両方からもたらされる恵みを受けたことが見て取れます。このような条件によって、沖縄の縄文時代の人々は世界的にも稀な「狩猟採集民による島嶼環境への適応」を果たしました。



過去2万年間の気候変動（春成2009に加筆）

約1万2千年前ごろより急激に温暖化し、今日の自然環境が形成されてきました。



サンゴ礁の形成過程模式図
〔菅(2014)に補色〕

約6000～4000年前にサンゴ礁が沖縄の各地で海面に達し始め、4000年前以降には現在のサンゴ礁と同様の環境が形成されました。

狩猟・採集 【山の幸】

遺跡から出土する動物骨は、もっぱら沖縄最大の哺乳類であるリュウキュウイノシシで、狩猟方法としては、石鎚^{かいそく}や貝鎚が九州以北の日本列島の縄文遺跡に比べて著しく少ないため、おとし穴獵が想定されています。

一方、敲石・磨石といった硬い殻をもった木の実を割り、磨り潰す石器は安定的に出土しているほか、貯蔵・水さらし等を目的としたとみられる遺構も発見されています。このことから、再生力の高い亜熱帯常緑広葉樹林帶の沖縄では、植物資源の利用が活発であったことが想定されます。

打製石鎚

日本の縄文時代では約12000年前より主要な石器として利用されました。しかし沖縄での本格的な利用は約4000年前からで、しかも極めて少数しか見つかっていません。(出土地:シヌグ堂遺跡・鏡水箕隈原A遺跡)



貝鎚

鎚に向く石材が乏しい沖縄では、真珠層の発達した貝を利用した鎚も作られました。(出土地:北原貝塚)

古我地原貝塚から出土した陸上動物骨

リュウキュウイノシシを中心に、コウモリやネズミなどがみられます。またこの遺跡ではイヌが出土していることが注目されています。





こがちばる
古我地原貝塚から出土したタブノキの種実
タブノキはクスノキ科の常緑高木で、関東以南から沖縄まで分布する照葉樹林を代表する樹木です。種実はアボカドに近い味がします。

やーばる
前原遺跡検出の種実貯蔵穴
種実を水にさらすことであく抜きをしつつ、貯蔵していたと
みられます。(宜野座村教育委員会提供)



縄文時代後・晩期の遺跡からは、深く落ち込む形状の大型土坑が検出されることがあります。近年、キャンプ瑞慶覧海軍病院地区の発掘調査（宜野湾市：普天間古集落遺跡）などで見つかっており、これらの多くは、深さが1m以上掘り込まれ、なかには岩盤まで達するものもあります。

この大型土坑の埋土からは、まれに縄文時代後期から晩期の土器が出土することから、縄文時代の遺構と考えられます。

遺構は、住居と考えられる竪穴状遺構から離れた場所に点在して検出されていることや、深く落ち込む形状から、おとし穴としての利用が想定されています。

しかしながら、現時点では検出事例が少ないと類例の発見が期待されます。

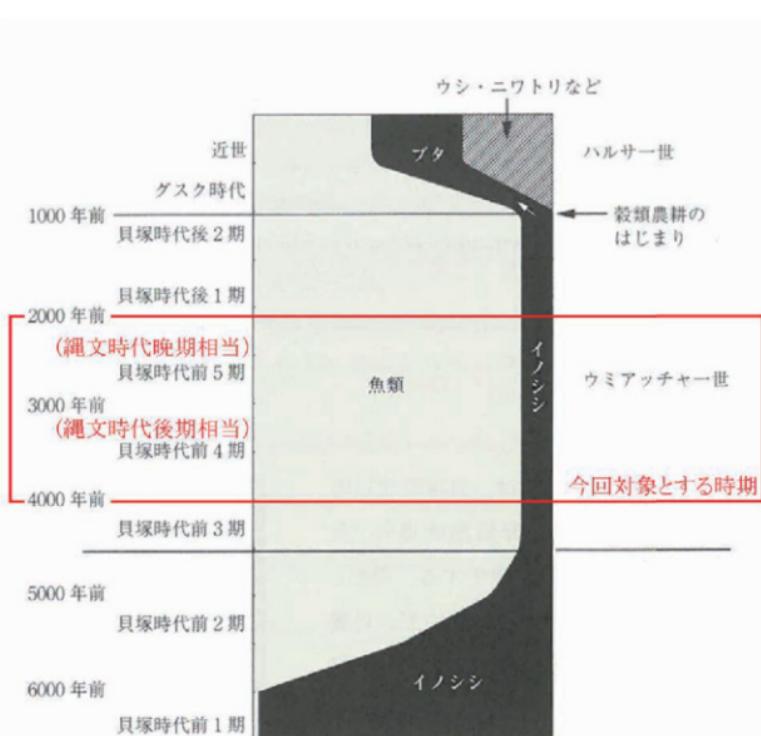


キャンプ瑞慶覧海軍病院地区（普天間古集落遺跡）

X地区 SK308 半裁状況

ぎょろう
漁撈 【海の幸】

出土する食糧残滓で最も多いのが魚骨や貝殻などの魚介類です。多くの遺跡が海岸近くに立地していることから、海の幸は縄文人が生きていく上で主要な食糧源だったことがわかります。これまでの発掘調査で出土した貝類は100種類を超える、また魚類にはブダイの仲間、エフキダイの仲間など、現代でも食卓にあがる魚を含む多様な種類を食べていました。また、クジラやジュゴンの骨も出土し、これらは蛋白源として食されるとともに、その骨は装飾品や祭祀具としても利用されました。



琉球列島における脊椎動物資源利用の変遷を示す模式図(樋泉(2014)、朱字部分加筆)
ピックアップ資料による比較的大型の動物（大型魚、ウミガメ、鳥獣類など）の組成変遷に基づく。

沖縄では各地にサンゴ礁のリーフが発達しており、そこを中心に漁撈が行われていたと考えられます。実際にはどのように魚を捕えていたのでしょうか。日本列島では、漁撈具として貝製及び骨製の釣り針や、鉛頭などの刺突具が一般的に出土しますが、沖縄の遺跡からはこれらの出土事例がほとんどありません。出土遺物から見る限りでは、釣りや素潜りなどで魚を捕えることは少なかったと思われます。しかし、魚を捕らえるための道具の製作に石や貝を用いずに、木などの遺物として残りにくい素材で作った鉛などを使用していた可能性も考えられます。

一方で、網漁については盛んに行われていたことがわかっています。日本列島でも見られる鉤、なかでも貝で製作した貝鉤が多く出土しており、これを装着した網を用いた漁法が考えられます。

貝鉤



貝殻に紐を通すための孔を開け、網の重りとして使用したと考えられます。二枚貝で製作されたものが多い。出土遺物が貝鉤であるかどうかは、孔の縁にサイズ調整のために敲かれた調整痕や、擦れてできた使用痕が見られるかなどの基準によって判別されます。(出土地：百名第二貝塚)

網を用いた漁といつても、その漁法には多くの種類が存在します。刺網漁や投網漁、追い込み漁など、魚の習性をうまく理解し、絡め捕るための漁法が数多くありますが、縄文時代の沖縄ではどのような網漁が行われていたのでしょうか。伊良部島などで古くから伝わる、魚垣と呼ばれる石積みを利用した漁法の民俗事例もあり、地形や潮の満ち引きを利用して魚を捕えていた可能性もありますが、そういう漁法を示す遺構はまだ見つかっていないため、どのように網を使用したのか、具体的なことはわかっていません。今後の調査で明らかにされることが期待されます。

縄文時代の遺跡からは、食事の痕跡として動物骨や魚骨などの食べ済が多く出土します。縄文時代後期から晩期の遺跡でも貝類や魚骨の出土は多く、海の資源を食糧資源としていたことがわかります。

その中でも、魚の捕獲方法については、漁撈の項目の部分で述べた通りです。それでは、捕獲していた魚の大きさはどのくらいでしょうか？



今回は、遺跡からの出土が多いブダイの仲間（イラブチャー）とハマフエフキ（タマン）の仲間の頸や咽喉、歯などの現生標本と比較しました。

当時の人が食べていた魚の大きさが思い浮かんだのではないしょうか？

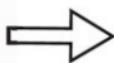
調理の道具 ①土器

土器の底

土器の形は縄文時代後期から晩期にかけて、ひらぞこから尖底せんていに変化します。底の形は、土器を火にかける時の据え方にも関わるため、当時の調理方法を考える上で重要なことです。



伊波式土器（縄文時代後期）



仲原式土器（縄文時代晩期）

火とスス

土器の器種（形式）には、大きく分けて深鉢形と壺形があります。深鉢形土器は、煮炊きの際に受けた痕跡がススとして残っていることから、現在の鍋のような使い方をしていたと考えられています。しかし、貯蔵に使っていたとされる壺形土器の中には、深い鉢形土器に似たススの付き方をしているものがあります。その理由は不明ですが、もしかしたら、壺形土器にも煮炊きに使っていたものがあるかもしれません。



深鉢形土器に残る帯状のスス
土器を巡るようにススが付いていることから、煮炊きに用いていたことが分かります。

調理の道具 ②石器

縄文時代の主な食料の一つとして、オキナワジイやオキナワウラジロガシに代表される堅果類と呼ばれる堅い木の実や、堅い殻を持つ貝類などがあります。これら堅い殻を潰す実用具として、河原や海岸などの自然礫を利用した、敲石類と呼ばれる石器があります。手に収まるサイズのものから、大型で重量のあるものも含まれます。主に砂岩などを石材として用い、対象を打ち割る、磨り潰すことを目的として使用されたと考えられます。貝を割ったり、堅果類などを磨り潰すほか、石器や貝製品、骨製品など他の道具の製作にも用いられたと考えられます。

また、敲石類とセット関係にある実用具に石皿があります。石皿は敲石類を使用する際の台として用いられた石器で、大型の砂岩礫などの石材が多く使用されます。敲石類をその上で用いることで表面が磨滅し、凹むといった特徴が見られます。



敲石類に残された使用痕

物を磨り潰すことによる摩擦で、自然面であつた表面が研磨されて磨滅し、光沢を持つようになります。多くの場合、敲石類は敲打面と磨滅した面の両方の痕跡が残っています。敲打痕は外縁部に見られることが多く、肌理は潰れ凹凸がみられます。

石皿・敲石

石皿と敲石類はセットで使用されることが前提の石器と考えられます。この台の上で堅果類や貝殻を打ち割り、磨り潰すことで、調理の下ごしらえを行っていたと考えられます。



縄文時代の暮らしをひも解くカギの一つに、ゴミ捨て場としての貝塚が挙げられます。貝塚とは、縄文時代の人々によって、利用された貝殻や動物骨、不要な道具などがゴミ捨て場として集められたものです。代表的な貝塚として、縄文時代中期～後期の古我地原貝塚が挙げられます。

貝塚に含まれる貝殻や動物骨を細かく分析することにより、食べていたものの種類や量、さらにそれらの生息地から、食料資源を求めてどこで狩猟・採集を行っていたかなど当時の行動範囲までも想定することができます。このように貝塚を調べることで、縄文時代の生活について私たちは深く知ることが出来るのです。

一方で、縄文時代晩期になると、遺跡は崖上の台地上に立地し、竪穴住居跡を残す遺跡が多くなりますが、貝塚は殆ど発見されていません。縄文時代晩期の人々は、どのような場所にゴミを捨てていたのでしょうか。



古我地原貝塚の貝層

装いと祈り

遺跡からは実用的な道具のほかに、装身具や使い方の分からぬモノが稀に出土します。これらの道具は身を飾るだけでなく、例えは邪なるものを祓うなどの護符あるいは^{まれ}祭祀的な意味が含まれるとみられます。また、実用具に比べて精緻に作られていることが多いという特徴があります。

日本列島の縄文文化では東日本を中心に勾玉や土偶などが有名ですが、沖縄にはみられません。沖縄ではその自然環境の影響からか海獣の骨や貝類が多用され、蝶形骨製品を代表に独自の装身具・祈りの文化が展開します。



様々な装身具

クジラなどの海獣類の骨を素材とした簪や腕輪、ほかにサメ歯やそれを模した製品や貝製の腕輪など、様々な製品が作されました。



蝶形石製品・骨製品

沖縄の縄文時代を代表する祈りの道具。ジュゴンの骨が素材。朱が塗られたものもみられ、当初はベンガラによる赤色だったとみられます。



用途不明の石製品

現代の我々には用途が理解できない祈りの道具と思われる遺物も出土します。

(出土地：新城下原第二遺跡)

3. 他地域とのつながり

交流の痕跡 土器

遺跡から出土する土器には、別の地域との交流の様子を窺えるものがあります。土器を良く見てみましょう。

土器の形、特に口の部分の形や底の形が一つ一つ微妙にちがいます。また、土器に描かれる文様もそれぞれちがいます。さらに細かい部分では、土器の素材となる土も異なることもあります。これらの中で似たような特徴をもつ土器をグループ化することで、土器の分布状況や時代が判明してくるのです。



面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式 A・嘉徳Ⅱ式

(古我地原貝塚・古座間味貝塚)

先端が三角形状の工具を押し当てながら連続して描いた文様です。それに沈線を加えたものや沈線のみで描かれるものがあります。

このような文様が描かれる土器は、沖縄の北側に位置する奄美諸島で多く出土します。

これらの土器が沖縄で出土することは、奄美諸島の人達と交流していた一つの証拠になります。また、浦添貝塚では、南九州で出土する市来式土器が出土しています。奄美諸島を越えて日本列島の縄文人と交流していた可能性もあります。

交流を示す石材

沖縄の縄文時代の遺跡からは、しばしば沖縄では得ることのできない素材で作られた遺物が出土します。これらの遺物は、九州島以北の社会と海を介した結びつきがあった証拠といえます。また、モノを介して様々な情報も得ていたと想定されます。縄文時代の頃より、沖縄は決して孤立した社会ではありませんでした。



黒曜石とヒスイ

黒曜石は佐賀県腰岳産、ヒスイは新潟県糸魚川産です。それぞれ石器や装身具に加工されています。これらの資料は、九州島以北の縄文文化と交流していたことを示しています。



黒曜石の消費

上の写真、右下隅の資料の拡大写真。鋭い縁辺部に刃こぼれが残っており、小破片でも使用したことが分かります。

縄文時代の沖縄の人々にとって、黒曜石は非常に貴重な資源だったようです。



おうあつはくり
押圧剥離

上写真右上の黒曜石製打製石鎌の拡大写真。九州島以北では後期旧石器時代の後半から用いられる技術で、日本列島の縄文時代における主要な石器製作技術です。

沖縄には約4000年前頃に打製石鎌とともにこの技術が伝わったとみられます。

おわりに

縄文時代の暮らしを、住まい、生活、他地域とのつながりという3つの大きな項目で見てきました。

住まいには、住環境を良くするための工夫が見られました。また、ゴミ捨て場もあることから衛生環境も整えていたことがわかります。

日々の生活は、道具作りから調理までを石や貝などの道具で行い、陸と海の両方から食糧を得て暮らしていました。

他地域とのつながりでは、沖縄以外の地域でとれる素材を利用した道具や、奄美諸島以北の土器が出土することから、海を越えた先の地域の情報を得ながら、自らの生活や文化を育んできたことがわかります。

豊かなサンゴ礁に囲まれた沖縄では、縄文時代から森や海といった自然からの資源を多く得ながら生活してきたことがわかりました。最近の研究成果では、遺跡から出土する貝類や魚類などは、絶滅することなく今日まで生息している種が多いことが判明しています。このことは、当時の人達が貝や魚を探り尽くすことはせず、自然と調和しながら共に生きていたことを示しています。



参考文献一覧

- 伊藤慎二 1994 「沖縄編年の現状と諸問題」『史学研究集録』第 19 号 66-90 頁
- 大堀皓平 2017 「沖縄・奄美諸島における黒曜石研究の現状」『南島考古』第 36 号 (高宮廣衛先生追悼号) p125-134 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会 2003 『沖縄県史 各論編 第二巻 考古』
- 菅 浩伸 2014 「琉球列島のサンゴ礁形成過程」高宮広史・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究論文集 [第 2 集] p19-28 六一書房
- 島袋春美 1991 「いわゆる『蝶形骨器』について」『南島考古』第 11 号 p1-20 沖縄考古学会
- 新里貴之 2007 「南西諸島出土のヒスイ製品」『南島考古』第 26 号 p65-80 沖縄考古学会
- 菅原広史 2014 「沖縄諸島の遺跡出土魚骨の分類群組成にみる「特異的」傾向」高宮広史・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究論文集 [第 2 集] p71-86 六一書房
- 高宮廣衛 1988 「伊波式土器の源流 - 神野貝塚の資料を中心として - 」『考古学叢考』斉藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編 p619-637
- 樋泉岳二 2014 「脊椎動物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化」高宮広史・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究論文集 [第 2 集] p71-86 六一書房
- 春成秀爾 2009 「第 5 部 研究の成果と課題」春成秀爾・小林謙一編『[共同研究] 愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 154 集 p525-547 国立歴史民俗博物館
- 盛本 煦 1988 「琉球列島の貝製漁網鍾」『季刊 考古学』第 25 号 p71-78
- 盛本 煦・久貝弥嗣 2005 「沖縄県の縄文時代装身具」『九州の縄文時代装身具 第 15 回 九州縄文研究会沖縄大会 発表要旨・資料集』九州縄文研究会沖縄大会実行委員会事務局 編 p308-362

おきなわ むかしむかし ギャラリートーク

縄文時代の最新の発掘調査成果を含め、専門員が分か
りやすく解説します。 (予約不要・参加無料)

第1回

11月5日 (日)

両日ともに

13:30~14:00 (30分程度)

第2回

11月25日 (土)

次回の催し

平成30年 1/16(火)~2/4(日)

巡回速報展 in 恩納村博物館

平成30年 2/16(金)~2/25(日)

巡回速報展 in 宮古島市総合博物館

平成30年 2/20(火)~5/13(日)

首里城京の内跡出土品展

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄 まいぶん

検索

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL: 098-835-8751

《アクセス》

●沖縄自動車道西原ICより車で約10分

●市外線バスターミナル発 那覇バス97番

首里駅発 那覇バス94番(但し平日のみ運行) 「琉大附属病院前」下車徒歩3分